

編集後記

淡路島と「鳴門の渦潮」の文化的価値を調査研究するという目的のもと始まった「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトも、本報告書の刊行を以て一つの区切りを迎えました。当初2年間の計画で進められたプロジェクトは、コロナ禍によって行動が制限される中、資料閲覧や聞き取りなどの現地調査も思い通りに進められない状態となりました。そんな中でも執筆者の方々には現地での調査活動を続けていただき、当初の予定より1年遅れとはなりましたが、このたび無事に刊行に至りました。

本報告書では、古代から近代まで各時代の研究成果が報告されています。神話に登場する淡路と渦潮の姿は、伝承や地名となって今もその面影を感じさせてくれます。古代の史料からは海を舞台に活躍する人々の営みや広い地域とのつながりを感じることができます。中世には武士の活動や商業の発達に伴って、そのつながりがさらに広がりを見せます。源平合戦や戦国時代の争乱とも無関係ではいられない海上の要衝として、淡路と阿波には多くの城郭が設けられてきたことも分かります。近世において海を介した他地域との関わりはさらに強固なものとなり、近現代にいたるまで淡路と阿波は物流や漁業の要として発展を続けてきました。しかしその間には多くの災害に見舞われたという歴史もありました。こうした歴史を後世に残そうと尽力した人々が近世期に多く存在したことで、当時の様子を鮮やかに蘇らせてくれる著作物が生まれたこともまた、今回の報告書に大きな影響を与えてくれました。

淡路と「鳴門の渦潮」にはまだまだ、語りつくせない様々な魅力があります。どの時代をとっても、探求心をくすぐる研究テーマが多くあります。今後も淡路と阿波をめぐる文化遺産が広く認知され、さらなる研究が進められることを願ってやみません。そして本報告書がその一助となれば幸いです。

令和5年(2023)2月

ひょうご歴史研究室研究コーディネーター 坂江 渉
「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト臨時職員 福永明子